【306】

| | |
|---|---|
| 氏　名（国籍） | 康　東　元（中　国）（こう とう げん） |
| 学位の種類 | 博　士（学　術） |
| 学位記番号 | 博　甲　第　4138　号 |
| 学位授与年月日 | 平成 18 年 3 月 24 日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第 4 条第 1 項該当 |
| 審査研究科 | 図書館情報メディア研究科 |
| 学位論文題目 | **日本近・現代文学の中国語訳とその歴史的意味**<br>－書誌作成と考察－ |

| | | |
|---|---|---|
| 主　査 | 筑波大学教授 | 黒　古　一　夫 |
| 副　査 | 筑波大学教授 | 山　本　順　一 |
| 副　査 | 筑波大学教授 | 小野寺　夏　生 |
| 副　査 | 筑波大学教授 | 綿　抜　豊　昭 |
| 副　査 | 文教大学教授 | 関　口　安　義 |

## 論　文　の　内　容　の　要　旨

その文化的側面に限っても古くから深い関係にある日本と中国であるが，改革開放政策＝中国における「資本主義市場経済化」（高度成長経済政策・80 年代後半）以降の中国では，その著しい経済的進展にともなって日本の現代文学，たとえば西村寿行，松本清張，森村誠一といった推理（ミステリー）作家の作品を始め，村上春樹，渡辺淳一などの「青春小説」や「恋愛小説」が数多く翻訳紹介されているが，その歴史を振り返ってみると，日本の近代文学が中国語訳されるようになったのは，日本が明治維新によって「近代化」を成し遂げた直後からであり，それは中国の時代区分では清朝末期に当たる。本論文は，そのような明治期（中国では清朝末）から現代にわたる 130 年間ほどの日本近・現代文学の翻訳状態を調べ，時代によってどのような特徴があり，それはどのような理由によるものであるかについて考察したものである（序章）。

第 1 章では，「清末における日本近代文学作品の翻訳と紹介」と題し，日本の近代化，特に「日清戦争」の敗北に刺激された清朝末の知識人（社会運動家も兼ねた）が，自由民権運動の一部として発展した東海散士の『佳人之奇遇』や矢野龍渓の『経国美談』などの「政治小説」を翻訳紹介したのを皮切りに，科学冒険小説，探偵小説，軍事小説などを次々に翻訳紹介したことについて，調査「資料」を基に述べている。それによれば，帝国主義列強からの圧力を受けながらその力と意味を充分に察知することのできなかった政治家（為政者）に代わって，知識人たちが日本の近代化に伴って生産された（出版された）様々なジャンルにおける小説を翻訳紹介することで，「政治」だけでなく「科学」などの様々な分野で中国の「近代化」を促す役割を果たしたのだという。

第 2 章では，「新文化運動（1917 年）から日中戦争（1937 年）まで」と題して，魯迅や周作人といった日本に留学した若き知識人たちによって同時代の作品の翻訳が行われたことについて述べている。この時期の翻訳状況に関する特徴としては，まず翻訳者となった魯迅たち日本留学生が，留学当初は文学ではなく医学や理学を学ぶために来日したにもかかわらず，留学中に日本の近代文学（近代文化）や日本の文学者たちに触れ，その結果として自ら翻訳者となると共に中国へ帰国した後，作家として活躍したということが挙げら

れる。この時期に翻訳された主な日本の近代文学は，島崎藤村や田山花袋らの「自然主義文学」と武者小路実篤や志賀直哉らの「白樺派」の文学であった。また，佐藤春夫や芥川龍之介もこの時期翻訳された。なお，もう一つこの時期の特徴として『現代日本小説集』や『武者小路実篤集』などのアンソロジーや個人作品集が翻訳刊行されるということがあった。

第3章では，「戦争文学と反戦文学の翻訳－日中戦争から中華人民共和国成立（1937～1949年）まで－」として，日本と中国とが戦争状態になっていたということもあって，石川達三の『生きてゐる兵隊』や火野葦平の『麦と兵隊』などの「戦争小説」や，鹿地亘（プロレタリア文学運動の指導者の一人で，戦争中は中国に亡命していた）の小説からエッセイにわたる「反戦文学」が翻訳紹介された。なぜ，この時期「戦争小説」や「反戦小説」が中心的に翻訳されたのか，著者は石川達三の『生きてゐる兵隊』を例に，その作品における写実的な描写（たとえば，残酷な中国人虐殺場面）が「反日」夢想や運動に役立ったからであったと結論づけている。また，日本でより中国で有名になった鹿地亘の著作についても詳細に調査し，その位置付けを行っている。

第4章では，「建国から改革開放（1949～1979年）までの三十年間」ということで，毛沢東率いる中国共産党が蒋介石の国民党を破って「革命」を成し遂げてから「文化大革命」を経て「改革開放」にいたる時期の翻訳状況について述べている。「建国」の後しばらくは，主に日本の戦前において一大文学運動となった小林多喜二や宮本百合子などのプロレタリア文学の作品や徳富蘆花の『黒潮』などの社会派小説の翻訳が盛んに行われるが，文化大革命時代にはほとんど日本文学は翻訳されなかったという。そのような日本文学の翻訳紹介状況下にあって，特筆すべきは1970年11月に自衛隊市ヶ谷駐屯地に私兵集団「盾の会」のメンバーと共に乗り込んで割腹自殺した三島由紀夫の最後の長編『豊饒の海』4部作（『天人五衰』,『暁の寺』,『春の雪』,『奔馬』）が翻訳されたことである。

第5章では，「改革開放以後（1979年）から現在までの翻訳事情」ということで，外国の文学や映画などの文化の翻訳紹介が「自由」になった現実を受け，日本の現代小説も推理小説（ミステリー）から大衆小説，青春小説，恋愛小説まで，あらゆるジャンルの小説が翻訳紹介され，日本でも400万部を超える大ベストセラーになった村上春樹の『ノルウェイの森』が，中国でもまた200万部を超えるベストセラーとなったように，中国における日本文学の翻訳も「世界同時性」を獲得するようになったことを述べている。ここでは，そのように多様な日本文学が翻訳され多くの読者を獲得したのは，「改革開放」政策によって「豊か」になった中国人の生活に余裕が生まれ，世界へ目を向けるようになったことが理由であるとしている。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

### 1．研究目的について

研究題目が示すように，本研究は「日本近・現代文学の中国語訳」の実情が歴史的･現在的にどのようになっているのかを目的に進められたもので，その点に関しては明確な目的意識を持って研究が進められたのではないかという意見がほとんどの審査委員から寄せられた。特に，この研究目的に基づいて行われた「調査」およびその「一覧（目録）」に関しては，その種の調査がこれまでの近代文学研究・書誌学的研究においても行われてこなかった事実から，その網羅性，包括性，徹底性には高い評価が与えられた。これも，確固たる研究目的が存在したからできたことであると，委員は納得させられた。

なお，この研究目的には，結果的に日本と中国との近代における文化（文学）交流史の考察も含まれていたが，日本の近代文学史（海外との交流史）については研究目的に沿って留学生としては納得できる研究が進められたとは言え，受け入れ側の「中国」における近代文学史についての言及が乏しく，もっぱらその記述が「翻訳史」に限定されてしまった点について，不十分だったのではないかとの意見も寄せられた。

## ２．研究方法について

まず本研究は，大学院前期課程（修士）で行った「調査」を基に，それを補充する「調査」に基づくデータを加えたものをベースに，中国の近代史（近代文学史）と日本の近代文学史を重ねるようにして，それぞれの時代に見られる特徴とそのよって来る理由について考察したものであるが，「1. 目的について」のところでも述べたように，日本の近代文学史については無難な形でまとめてあるが，中国の近代文学史については不十分な記述と考察になったのは，自国（中国）の近代文学史について十分な見識がないからではないか，という意見もあった。特に，本研究にとって重要な意味を持つ中国近代史については「公式・教科書」的な観点に終始し，留学生という立場を考慮しても独自な視点が感じられないのが欠点として指摘された。

ただ，本研究では「資料」となっている「翻訳作品一覧」は，「作家別」（50 音順），「作品集」，「年代別」にまとめられており，見やすい形になっているとの意見が多かった。また，その「一覧」をどのように作成したのかという点に関して，「書誌作成」の原則である「現物」に当たるという基本的態度は守られ，現物に当たることが不可能な場合，公開されている「目録」から一つ一つ探し出す作業の結果であるという報告を聞いて，方法的には最上な形で進められたのではないか，という評価が与えられた。

## ３．内容について

(1)　論文の構成について－　日本の時代変化と中国社会の在り方とが必ずしも一致しているわけではなく，その点を考えると論文の全体構成に偏りが見られた。言い方を変えれば，翻訳作品の量の多さという点からも仕方がなかったのかもしれないが，「現代」に多くのスペースが費やされ，戦前（特に，第 2 章に該当する，日本では「大正」「昭和」の初年代）についての記述があっさりしすぎていたということである。日本における時代区分と中国における時代区分の「ずれ」については，どのように整合性を持たせるのかこれからの議論を待たなければならないが，より適切な近代から現代にかけての「日中文化（文学）交流史」を考えるためにも，論文の構成（時代区分）についての再検討が必要なのではないか，という意見も寄せられた。

(2)　記述の仕方について－　その歴史的位置づけが日本と中国とで異なるのは仕方がないとしても，内容によっては中国の「公式的」な立場に立った見解に傾斜しがちな部分が散見された。歴史的記述については必然的に論者の立場が反映するものであるが，それをできるだけ「客観的」なものにするという態度も研究者に必要なことなのではないか，との意見もあった。ただ，留学生としては，日本の近代史及び近代文学史をよく勉強しており，そのことが本論文の密度の濃さに反映しているとの評価も得た。

(3)　資料整理の仕方について－　これまでこの種の研究がなされてこなかった事実を踏まえると，著者独自な方法に基づいて整理してあり，日本における近代文学史研究に関してはもちろん，中国においても日本と中国の文化（文学）交流史をこれから学ぼうとする人たちに大いに役立つものを作成したと言える。また，この「資料」（付録）は，日本の近代文学研究における個別作家研究，たとえば芥川龍之介，夏目漱石，小林多喜二，村上春樹，等々の研究に大いに寄与するものになっている。これは，中国側から見ても同じことが言える。つまり，最近盛んになった中国における「日本文化・日本文学」の研究に関して，たとえば，「中国文学への日本文学（翻訳）の影響」というような研究主題に対して著者の作成した「資料一覧」は大いに役立つということである。

(4)　研究の新規性・独創性について－　審査の過程で議論になったのは，本研究がこれまで日本ではもちろん中国でも全く行われてこなかった研究で，「書誌」作成という地味な基礎的研究でありながら，その新規性･独創性は誰もが認めざるを得ないというものであった。また，本研究が今後の近代以降における「日中文学交流史」研究の礎の一つになることは間違いない，と審査委員の多くが認めた。

## ４．最後に

本研究論文は，作成した「資料一覧」を基に，論文本論のダイジェストを「解説」として付け，さらには巻末に「作品名索引」を付し，タイトル名を『日本近・現代文学の中国語総覧』と変え，2006 年 1 月 20 日，全 300 頁の単行本として，勉誠出版から刊行された（定価　5000 円　監修者 : 黒古一夫）。

よって，著者は博士（学術）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。